

狂信テロ集団「イスラム国」
非人間的な、
あまりに非人間的な

アメリカの 不都合な真実

「大量破壊兵器を保有している」とウソをついてイラク戦争を起こしたアメリカ。
この超大国は、イスラム国に関しても腰に傷を持っている。

きたのよしのり
北野幸伯

国際関係アナリスト

1970年生まれ。外交官とFSB(元KGB)を養成するロシア外務省付属「モスクワ国際関係大学」を日本人として初めて卒業。従来とは違った手法で世界を分析するアナリストとして活躍中。

全国民が、「イスラム国」に憤怒して
する。

湯川遥菜さんと後藤健二さんを拉致し、交渉が行き詰まると、二人を殺害した。その驚くべき残忍性に、日本国民も全世界の人々も、怒りに震えている。筆者もまた、一日本国民として、その怒りを共有してゐる。

しかし、国際関係を分析するものとして、「憤ってらます」と宣言しても意味はない。冷静に事件が起こった背景を調べ、伝えなければならぬ。

となると、事はそう単純ではなくなってくる。

「シリアの正当な政府」と承認した。

ところが、アサドは手強く、なかなか打倒されない。業を煮やしたオバマは、2013年8月末、ついに「シリアに軍事介入する」と宣言する。その直接的理由は、「アサド軍が反体制派に化学兵器を使用したこと」とされた。

ところが、オバマは同年9月10日、「シリア攻撃をやめる」と発表し、世界を驚かせる。この決定変更で、オバマは、「決断力がない」「指導力が欠如している」など、さんざん批判された。

公式理由は、「ロシアがシリア政府に『化学兵器を放棄するよう』提案し、アサドが承諾した。そしてオバマも納得したから」となっている。

しかし、よく考えるとこれは、「殺人をしても、それに使った凶器を差し出せば、すべて許される」というおかしな論理である。

もう一つ、ロシアがこの提案を行ったのは、その前日の9月9日。

一方、米国最大の同盟国で、常に同国の戦争につきあってきた英国は、8月29

「絶対善の欧米」対「絶対悪のイスラム国」という今の構図とは異なる、両者の過去の「つながり」が見えてくるからだ。

皆さんは、「イスラム国」を育てたのは「米国」であるという「事実」をご存知だろうか？

「陰謀論か」と思われた方も、念のため最後まで読んでいただきたい。なぜなら、それは「絶対的真実」なのだから。

オバマの憂心

「イスラム国」の正体を知るために、2011年まで話をさかのぼらなければならぬ。シリアでは、この年の初めから

日の段階で、はやばやと「シリア攻撃に参加しない」ことを決めていた。

「世論が反戦で、議会が反対した」のが表むきの理由だが、詳しく調べてみると、いろいろ「裏の理由」が出てくるのだ。なぜオバマは、突然シリア攻撃をやめたのだろうか？

シリア攻撃中止、仰天の理由

実をいうと、米国政府は、シリアについて「二つのウソ」をついていた。

一つ目は、「アサドが反体制派に対し、化学兵器を使った」件に関するウソ。こちらの記事を熟読していただきたい(太字筆者)。

シリア反体制派がサリン使用か、国連調査官

【AFP11時事】シリア問題に関する国連調査委員会のカーラ・デルポント調査官は5日夜、シリアの反体制派が致死性の神経ガス「サリン」を使った可能性があると述べた。

スイスのラジオ番組のインタビュートでデルポント氏は、「われわれが収集した

反政府デモが頻発。やがて内戦に発展していった。

欧米は、「アサド(大統領)は、独裁者で悪」「反アサド派は、民主主義を求め善」と世界に宣伝。「反アサド派」を支援しつづけてきた。

ところで、「反アサド派」にもさまざまな勢力があり、個別にアサド派と戦っていた。しかし、「力を結集しなければアサドには勝てない」ということで、2012年11月、反体制派を統合する組織「シリア国民連合」がつくられた。

日本や欧米諸国、その他多くの国々が、アサドではなく「シリア国民連合」を、

証言によると、反体制派が化学兵器を、サリンガスを使用した」とし、「新たな目撃証言を通じて調査をさらに掘り下げ、検証し、確証を得る必要があるが、これまでに確立されたところによれば、サリンガスを使っているのは反体制派だ」と述べた。(AFP11時事2013年5月6日配信)

国連の調査によると、化学兵器を使ったのは、なんと「反アサド派」だということだ。

もちろん、アサドが化学兵器を使った可能性が全くないとはいえない。しかし、米国は、この国連報告を完全に無視し、「アサド派だけが化学兵器を使った」と世界的プロパガンダを展開した。

もう一つは、「シリアの反体制派は、民主主義を求める善なる存在」というウソ。

AFP11時事2013年9月21日配信を見てみよう(太字筆者)。

シリア北部の町占拠、反体制派とアルカイダ系勢力 対立の背景

【AFP11時事】トルコとの国境沿いに

あるシリア北部アレッポ県の町、アザズで18日に戦闘になったシリア反体制派「自由シリア軍」と国際テロ組織アルカイダ系武装勢力「イラク・レバントのイスラム国」が停戦に合意したと、イギリスを拠点とするNGO「シリア人権監視団」が20日、明らかにした。

「シリア反体制派」に属する、「自由シリア軍」と「イラク・レバントのイスラム国」が仲間割れしていたが、「停戦に合意した」という記事だ。

この「イラク・レバントのイスラム国」は、「国際テロ組織アルカイダ系武装勢力」だとはっきり書かれてある。

「アルカイダ」はいくらまでもなく、「9・11」を起したとされるテロ組織。

米国は、自国民を3000人以上殺した組織の一味を、「独裁者アサドに抵抗する『民主主義勢力』だ」と宣伝し、支援していたのだ。

①化学兵器を使ったのは、「アサド派」ではなく「反アサド派」

②「反アサド派」は、「民主主義者」ではなく、「9・11」の犯人とされる

破壊兵器計画や、国際テロ組織アルカイダとの関係についての情報を検証した報告書を発表した。(読売新聞06年9月9日付夕刊)

報告書は「フセイン政権が(アルカイダ指導者)ウサマ・ビンラーディンと関係を築こうとした証拠はない」と断定、大量破壊兵器計画についても、少なくとも1996年以降、存在しなかったと結論づけた。(同前)

これを読むと、イラク戦争は、「どれほど理不尽な戦いだったのか」と驚かされる。この件については無美のフセインが処刑されたことも問題だが、この戦争で、11万人を超えるイラク人が亡くなったのだ(50万人とする報告もある)。

「アルカイダ系」(もちろん、「反アサド派」は「アルカイダ系」ばかりではないが)

米国民は、オバマ政権が、アルカイダを支援するためにアサドと戦争することを支持するだろうか? しないに決まっている。

この二つのウソを世界にバラしたのが、アサドを支持するブーチン・ロシアだった。2013年6月のG8サミットでも、そのことを公言していた。それが、欧米の世論に影響を与えたのだ。「不都合な真実」が(日本以外の国々に)ひろまって困ったオバマは、「シリア攻撃声明」を撤回せざるを得ない状況に追い詰められたのだ。

さて、この「イラク・レバントのイスラム国」が、いまの「イスラム国」である。2014年2月、アルカイダは、「われわれとイスラム国は無関係」と声明を出したが、もともと「アルカイダ系」だったことは否定できない事実である。

「反アサド派」として米国から支援を受け、太った「イスラム国」は、その後主

その他、米国は新世紀に入ってから、アフガニスタン(01年)、リビア(11年)と戦争をしているが、いずれもイスラム教国だ。

事情はどうあれ、欧米はイスラム教国を攻撃し、多くの民間人を殺している。

イスラム教国でも、イランやシリアなど一部の国々をのぞけば、「親欧米」のスタンスをとっているケースが多い。

しかし、それは指導者だけで、民衆レベルでは欧米に対する憎悪がうずまいている。そんな状況で、一部が過激化し、報復に出るのは予想できる事態である(もちろん、米国は米国で、「9・11」の報復だ」というかもしれない。しかし、イラク、リビア、シリアは、9・11とはま

人(米国)に反旗を翻し、シリアとイラクにまたがる広大な地域を実効支配するに至っている。

米国は、アサド政権を打倒するために「イスラム国」を利用したが、「イスラム国」も存分に米国を利用したということなのだ。

イスラム教徒の深い傷

米国の「いいかげん」さは、シリアにはじまったことではない。

03年から11年までつづいたイラク戦争も、かなり「インチキ」だったことが明らかになっている。

米国は、「フセインが大量破壊兵器を保有している」「アルカイダを支援している」ことをイラク攻撃の理由とした。しかし、この二つが「大ウソ」だったことは、米国自身も認めている。

フセイン政権、アルカイダと無関係

【ワシントンII真広貴志】米上院情報特別委員会8日、イラク戦争の開戦前に米政府が持っていたフセイン政権の大量

ったく関係ない。そして、シリア、イラクに関するウソについては、すでに触れた。

そんな中、日本は、「イスラム国」を空爆する欧米支持の姿勢を明確にした。だから、狙われるとしてもまったく理由がないことではないのだ。

もちろん、民間人を拉致し、法外な身代金を要求、拒否すれば公開処刑するイスラム国を許すことはできない。

しかし、大人として、事件の「背景」を知っておくことも必要だろう。

日本政府は、シリア、イラクへの「邦人渡航禁止」など、根本的な対策をとるべきだ。でなければ、悲劇は再び繰り返される。

江藤淳と大江健三郎

小谷野敦

戦後日本の政治と文学

宿命の敵同士として知られた江藤と大江。両者の政治的立場や文学的営為とその変遷を通して、戦後日本の文壇・論壇を浮き彫りにする。決定版ダブル伝記。

● 本体2400円+税

筑摩書房

サービスセンター 048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/